

〈黄帝と老子〉雑観 第13回

## 天の聖数が繋ぐ万物感応のネットワーク

『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある (その1)

『黄帝内経』研究家 松田博公

ツイート 2

いいね! 3

- 第8回 [『黄帝内経』には天を畏れる災異思想の痕跡がある？](#)  
[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その2\)](#)
- 第9回 [天地人三才思想の源流は黄老文献にあり](#)  
[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その3\)](#)
- 第10回 [天道は循環し、経脈も循環する](#)  
[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その4\)](#)
- 第11回 [王の治身が治国の本である](#)  
[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(前編\)](#)
- 第12回 [『黄帝内経』の身体国家論の完成と風化～『素問』靈蘭秘典論から『靈枢』師伝篇、外揣篇へ](#)  
[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(後編\)](#)

読者の方々は、中国人の図表好きに気づいておられることだろう。ちょっと考えただけでも河図・洛書の魔方陣、陰陽太極図、易図が思いつく。五行の相生相克、脈診や運氣論なども図で表現されている。中国人は古来、物事を抽象化し、図式化し、視覚化する能力に秀でた人々であり、図表文化を発展させてきた。日本人は、そうした図表文化は持たない。そこから中国鍼灸と日本鍼灸の違いが透けて見えるが、そういう議論はされてこなかった。

こうしたことを念頭に、中国古代鍼灸の原理を図形に表現してみよう。まだ誰もやったことのない、大胆不敵、荒唐無稽かもしれない初公開である。といっても、複雑な図ではない。あっけないほど簡単である。

最初に円を描く。その円の中に四隅が接点を持つ正方形を描く。正方形と円の交点から対角線を引く。それだけである。複雑な『黄帝内経』の思想構造が、こんな子ども騙しの幾何学図のようなもので分かるかと、どこからかブーイングが聞こえて来そうである。



今週号のPRの部屋はこちら

●在宅ケア実践セミナー  
(2015/3/22)

■ヒューマンワールドのセミナー

●「ていしん入門」セミナー  
(2015/2/8)●「超楽トランスファーテクニック」セミナー  
(2015/3/21)●「クリニカルストレッチセミナー」  
(2015/4/19)●「変形徒手矯正術セミナー」  
(2015/6/7)★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿

原稿を募集しています。

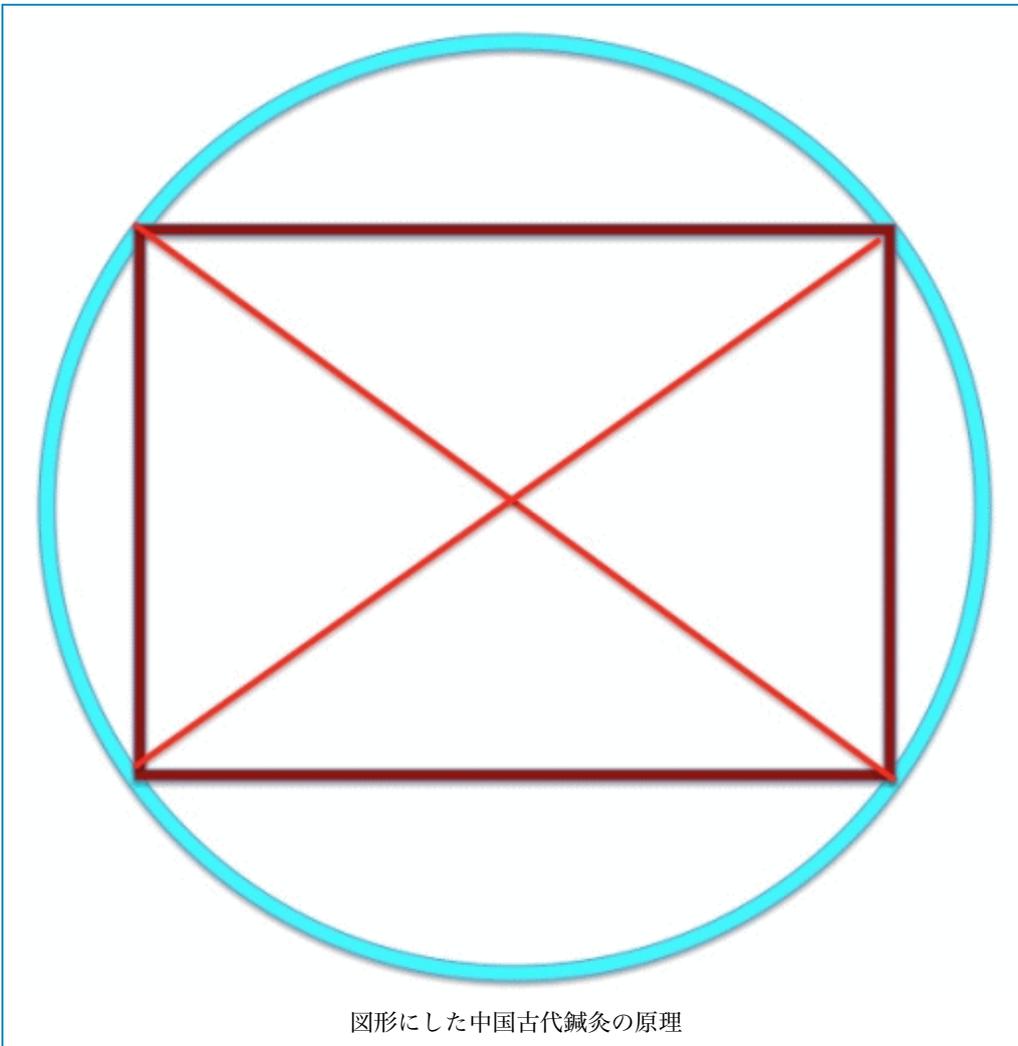
★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)



図形にした中国古代鍼灸の原理

だが、この1年間、「〈黄帝と老子〉雑観」を綴ってきたわたしには、『黄帝内経』の原理は、この簡単な装置で説明できるのである。

まず、円である。これは、中国古代思想の共通基盤であり、『黄帝内経』にも貫かれている「天」ないし「天道」または「宇宙」を表している。同時に、この円は、気の上下・陰陽・四時（=四季）の循環の法則、「円道」の意味である。つまり、この円は、『黄帝内経』の医学が「天道」に則り、「天道」が気の上下・陰陽・四時の循環の法則に従っていること、さらに、鍼灸技術も、「天道」に則り、気の上下・陰陽・四時の循環の法則に従うべきことの端的な表現なのである。

次の正方形は、「地」を意味している。円と正方形が接しているのは、天地の交わりを表している。「天と地が交わり生まれるもの、それを名づけて人という」（『素問』宝命全形論篇）。かく言う人は、正方形の対角線の交点、図形中心の1点である。中心点が人であるという配置は、「人よりも貴きはなし」（『素問』宝命全形論篇）という『黄帝内経』の人間中心主義と医療技術に対する誇らしい肯定を象徴している。

ここまでの説明で分かるように、この図形は、『黄帝内経』の原理が天

人合一であり、刺鍼技術においても「天の法則、地の法則を用いなければ、災害が起こる」（『素問』陰陽応象大論）」と強調していることを読者に想起させたいがためのものである。

また、この図形をより細かく、宇宙と身体を貫く「天地人三層構造」図と理解することもできる。宇宙三層構造論は、これまで言及してきたように、『素問』三部九候論篇の脈診論などに見られる、『黄帝内経』の身体宇宙観の重要要素であった。

それだけでなく、この図形は、気一元論、陰陽論、五行論も含んでいる。円は、古代以来、中国で「一」や「太一」と命名されてきた大きな気の全体性の造形であり、『黄帝内経』が立脚する気一元論を表現する。その円が、2本の対角線で重ね合わせに分割されている形を、ぐるぐると回転する陰陽太極図に見立てることができる。また円と正方形の交点4点と対角線の交点1点、合わせて5点で、五行論を暗示している。

つまり、この図形は、『黄帝内経』を成り立たせている古代鍼灸の原型の論理をほぼ表現し終えているのである。

だが、この説明はまだ、この図形の含意をすべて読み解いたことになってない。『黄帝内経』の原理は、これだけでは足りない。というと、そりゃそうだよ、あれも足りない、これも足りないと、皆さんは言い始めるだろう。経脈論はどこにある、蔵府論はどうなっている、虚実補瀉論もないね、と。

いや、わたしが足りないというのは、そういうことではない。経脈論も、蔵府論も、虚実補瀉論も、『黄帝内経』では、天地と身体の構造の合一性や四季と日月星辰の運行の法則から導かれているのである。それらはすべて、この円と正方形が交差する天人合一の宇宙論的時空から取り出せる。だから、これまでの説明に論理としては既に含まれていると強弁しても、この連載に長くお付き合いいただいた読者の方々には、お許しいただけるだろう。

#### ◇数術とは何か

かくして、わたしが黄老思想とかかわりの深い『黄帝内経』の原理的思考として指摘してきた「天道」思想、天地人三才思想、気の循環の思想や気一元論、陰陽論、五行論などは、この図形に載せることができた。治身治国論さえも、この図形の範疇である。対角線が交わる中心の座に、一般的な人でなく王を置けば、王が天地宇宙の気を受けて健康であることで天下は健康である、という天人合一身体国家論の構図が浮上する。

しかし、まだ足りないものがある。中国人が連綿と作成してきた図表は、必ず数（かず）と結びついていたのである。図表文化は数の文化でも

ある。典型的には、一から九の数で構成された魔方陣がそうだし、陰陽図や易図も一、二、三、四、八やその倍数を隠し持っている。脈図や運氣論も同様に三、五、六、九、十、十二、二十四、二十八などの数から構成されている。

こうした中国人の数への神秘主義的な信仰、それが漢代以来、「術数」ないし「数術」と呼ばれてきたものである。わたしたちは、黄老思想を導き手として『黄帝内経』の原理的思考を探ってきたが、まだ検討していなかったものが、その数術である。上記のわか仕立ての図形にも潜んでいる数を指摘し、解読を完成させるために、それでは、「『黄帝内経』の数術」という未知の領域に分け入ることにしよう。

最初に、「数術」という概念のイメージを固めておきたい。

前漢の時代に宮廷の書庫にあった学術書名を収録した後漢の目録書『漢書』芸文志は、書籍を以下の六略に分類している。

①六芸略（儒教経典）②諸子略（諸子百家の書）③詩賦略（文学作品）  
④兵書略（兵書）⑤数術略（天文書・暦譜・算術書・占書・人相書）⑥方技略（医書・房中書・仙術書）

この⑥方技略に「黄帝内経十八卷」が記載されているが、それはさておき、⑤に「数術略」とあり、その項目に集められているのは、「天文書・暦譜・算術書・占書・人相書」などである。そのことから、「数術」とは、「日月星辰や天地の気の運行、人の運命などの法則性を指し示す聖にして神秘なる数や徴（しるし）を解釈する技術」だと分かる。

それを踏まえると、『素問』『靈枢』に登場する次のような「数」に関する謎めいた言及も理解しやすくなる。

「上古の人、其の道を知る者は陰陽に法り、術数に和す。食飲に節あり、起居に常あり、妄（たばかり）に勞をなさず。故に能く形と神と俱にして、ことごとくその天年を終え、百歳をこえてすなわち去る」（『素問』上古天真論）

この「術数」は、「数術の対象となる数」であり、「術数に和す」とは、天文・暦・占術・陰陽五行の法則性と調和した生き方をすることである。

「夫れ人の常数は、太陽は常に多血少気、少陽は常に多気少血、陽明は常に多血多気、厥陰は常に多気少血、少陰は常に多血少気、太陰は常に多血少気。此れ天の常数なり」（『靈枢』五音五味篇）

「常数」とは、不変の法則性のことである。『黄帝内経』は、陰陽に分

かれる経脈のそれぞれで気血の量が異なるのは、天地の陰陽と人の陰陽が合致する不変の法則だと言いたいのである。

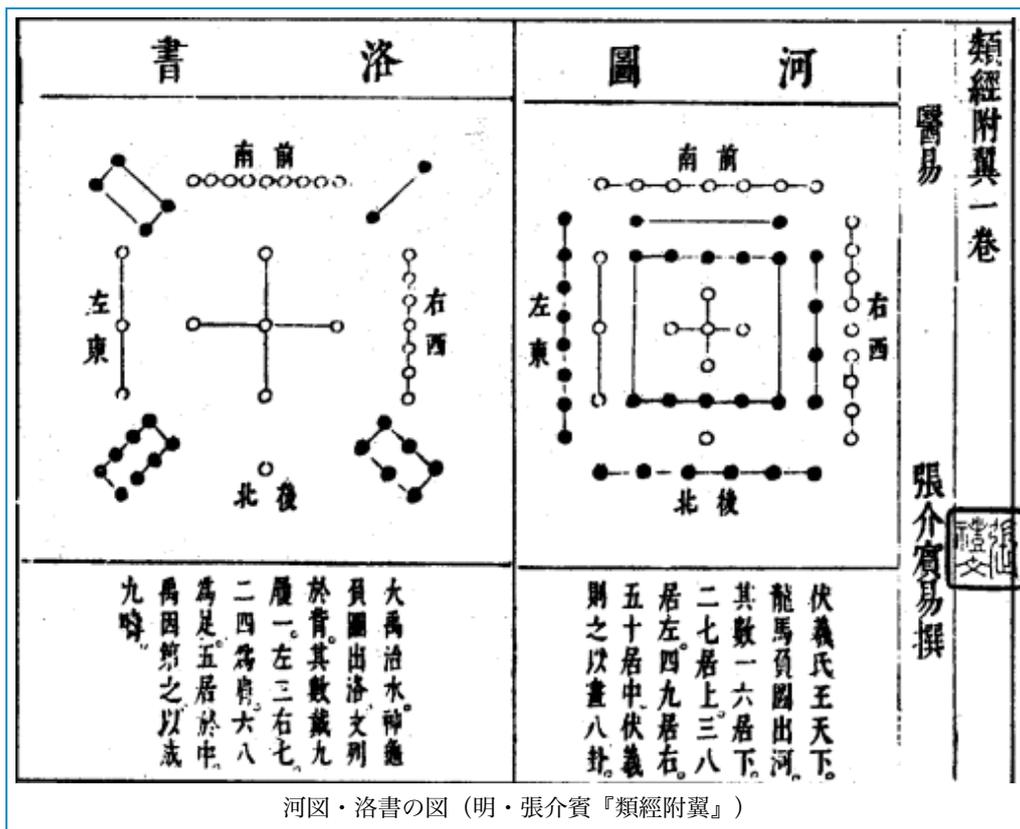
「天地の至数、一に始まり、九に終わる」

「天地の至数、人形（じんけい）、血気に合す」（『素問』三部九候論篇）

「至数」とは、天地の構造を示すマジカルな聖数であり、それは人の形態や気血運行の構造を示す数と合致する。聖数を同じくする人体は、天地に繋がる聖なる存在であるという「天人合一観」なのである。

### ◇気穴三百六十五はもって一歳に应ず

これらの「数」の意味は、現在わたしたちが使う「数」のそれとはまったく違う。『黄帝内经』における「数」は、一つ、二つ、三つと計算するための単なる実数や無機的な符合ではなく、天地人を繋ぐ濃厚な神秘作用をまとった宇宙論的媒介なのである。『黄帝内经』には、一、二、三、四、五、六、七、八、九の数字やその倍数が、呪文のように使われている。それを挙げてみよう。



### ツボの数は1年の日数に対応する

「黄帝問うて曰く、余聞くに、気穴三百六十五はもって一歳に应ずと。未だ其の所を知らず。願わくば卒く之を聞かん、と。岐伯稽首、再拜して对えて曰く、（略）凡そ三百六十五穴は鍼の由りて行く所なり、と」（『素問』気穴論篇）

「歳に三百六十五日有り、人に三百六十節有り、地に高山有り、人に肩膝有り、地に深谷有り」（『靈枢』邪客篇）

「計（かぞ）うるに人もまた三百六十五節有りて、以って天地を爲して久し」（『素問』六節藏象論篇）

### 五、六およびその倍数は天地と世界と人体とを繋ぐ

「余聞く、人の天道に合するや、内に五藏あり、以って五音、五色、五時、五味、五位に應ずるなり。外に六府あり、以って六律に應じ、六律は陰陽諸経を建て之を十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時に合す。十二経脉は、此れ五藏六府の天道に應ずるゆえんなり」（『靈枢』経別篇）

「六なるものは律なり。律なるものは陰陽四時を調べて十二経脉を合する」（『靈枢』九鍼論篇）

（ここでは、六およびその倍数の十二の音階を持つ音楽が経脉を構築し、天地を巡る春夏秋冬の気の流れと人体の十二経脉の気の流れを統括するという、網の目の如き「宇宙—音楽—身体」論が展開されている。それについては、次回以降、解説することになるだろう）

### 天地と人体は構造が同じで数も同じである

「黄帝伯高に問いて曰く。願くは聞かん、人の肢節、以って地に應ずるは奈何。伯高答えて曰く、天は円く地は方なり。人の頭は円く足は方にしてもって之に應ず。地に九州有り、人に九竅有り。天に四時有り、人に四肢有り。天に五音有り、人に五藏有り。天に六律有り、人に六府有り。天に十日有り、人に手十指有り。辰に十二有り、人に足十指・茎・垂有り以って之に應ず。女子は二節足らざるも以って人形を抱く。歳に三百六十五日有り、人に三百六十節有り。地に十二経水有り、人に十二経脉有り。歳に十二月有り、人に十二節有り。此れ人と天地相応ずる者なり」（『靈枢』邪客篇）

「天地の間、六合の内、五を離れず、人も亦た之に應ず」（『靈枢』陰陽二十五人篇）

「人に三部あり、部に三候あり……三部には下部あり中部あり上部あり。部には各々三候あり。三候には天あり地あり人あるなり」（『素問』三部九候論篇）

数に神秘的な力を見いだす感覚は、古代中国人だけのものではない。新石器時代には数は宇宙の秘密を隠していると考えられ、シャーマンによる占いが行われていた。古代ギリシャでは、ピタゴラス（紀元前582年～紀元前496年）が音楽と数を絡めて「数秘学」として体系化し、その後の西洋哲学に深い影響を与えた。（ピタゴラスの数秘学、音楽論と中国の術数、音楽論の間には関連性が指摘されている）

現代の未開社会をフィールドに、人類が抱いてきた数の神秘主義を解明した古典的な著書が、1910年、フランスの人類学者レヴィ・ブリュルが刊

行した『未開社会の思惟』（岩波文庫）である。ブリュルは、未開の民族には数の神秘性・魔術性に関する「迷信」が限りなく存在するとして北アメリカやアフリカなど世界各地の調査報告を収集・分析した。

彼によれば、一が万物の始原であるという思想は洋の東西を問わず見られる。一が善、秩序、完全、幸福々の原理である所では、二は一とは対照的に悪、無秩序、不完全の原理で不幸の原因である。三は多くの民族で完全性、究極数、絶対全数、無限を意味する。四はどんな数にも勝る神秘力を持った聖数で、北アメリカの未開社会では、東西南北の四方位とそれと関連づけられる色およびその方角から吹く風、四方位を支配する神と結びついている。

五、六についての詳しい考察はないが、その中で報告されている四方位に天が加わり、中央が加わって五、六方位となり、聖数とされるという北アメリカの例は、中国と同じで興味深い。七を聖数とする地域、民族の事例は多い。マレーの呪術では、七という数は驚くべき重要さを占め、古い印度神話には、七つの地母神、七つの大洋、七つの賢者、七つの太陽と悪神、七つの太陽の馬が現れるなど、七の神秘力への観念がうかがえる、などである。

#### ◇「融即」～万物融合の神秘的世界観

人類が数に込めてきたこうした信仰的、呪術的な観念は、中国の数術観と酷似している。レヴィ・ブリュルは、その分析によって得た発見を、「神秘的価値を持つ数の倍数はその原数の特性に融即する」と述べているが、それは数術に当てはまる。なかでも、「乗法は主として一全体の諸部即ち先ず全そのものに対して行った除法を適用して後なされるように思われる。例えば、宇宙の三分（天、地、大気）は、これら三つの世界にも繰り返されて（三つの天、三つの地、三つの大気）、全部で九つの世界となる」のは、『素問』三部九候論篇の数術そのものである。

レヴィ・ブリュルは、未開社会の人々には、すべてが融（と）け合い即時に関係しているという万物一体の神秘的世界観があるとし、それを表す「融即」という概念を提唱して、文化人類学や精神医学に深い影響を与えた人としても知られている。（フランス語の原語は、participation。「融即」は訳者・山田吉彦のオリジナルな翻訳語である）

彼は、近代人の思惟と未開人の思惟を比較し、二つはまったく異なっていると主張した。近代人は論理学の矛盾律「Aであり同時にAでないことは、ありえない」に従っているが、未開人は「融即」律に従うというのである。例えば、影を傷つけると本人自身が傷つく、干ばつの原因がカトリック宣教師たちの長い法衣のためだと認識し、北部ブラジルのボロロ人の場合、自分たちはボロロ人であり、また金剛インコでもあると思っている。

このように、未開人の思惟においては、事物や現象は、「（現代人に）理解しがたい仕方により、それ自身であると同時にまたそれ自身以外のものでもあり得る。また同じく理解しがたい仕方によって、それらのものは自ら存在するところに在ることを止めることなく、他に感ぜしめる神秘的な力、効果、性質、作用を発し或いはそれを受ける」。数についてもレヴィ・ブリュルは、「原始人は数を表象するときには毎回、必ず、神秘的な融即によって、その数だけに属する神秘的な作用力、価値を表象するのだ。数とその名称は差別なく融即の仲介物である」と説明した。

こうした「融即」の感覚を新石器時代以来、中国人も持っていたのである。あらゆる存在は天地宇宙と繋がるという天人合一観やいま議論している数術も、春秋戦国時代や漢代など特定の時代に特定の思想家が唱えたというよりも、古くからあった「融即」の原始感覚を、戦国時代以降の知識人が概念化し理念化したと考えた方がより本質的な理解にたどりつけるだろう。というのも、さまざまな局面で人類の古い意識形態をよく保存しているのが、中国文化の特徴だからである。

現代人は、日常の中で数を矛盾律で把握している。1と2は異なり、5は4よりも多い。500と501は確実に差がある。わたしたちにとって、数とは何にも増して、あるものと他を区別し差別し分断する認識であり、生産、商業や科学に不可欠なツールである。しかし、「融即」律に立つなら、数はまったく異なる相貌をもって現れる。古代中国人は、それを身を以て生きていた。『老子』の印象的な記述を読んでみよう。

「道は一を生み、一は二を生み、二は三を生み、三は万物を生む。万物は陰を負うて陽を抱き、沖気(ちゅうぎ)はもって和を為す」（『老子』第42章）

これら一、二、三の数は、天地宇宙の万物をいったん区別しながら、究極的には万物が宇宙と繋がっていることを示すために使われている。『老子』は人々が原始時代から実感していた宇宙の全体性を「一」という数に集約した。そしてその「一」から発生する陰陽の「二」気が睦み合うことで天地が生き活きと運動し、その生殖力に満ちたダイナミズムの中から「三」によって象徴される万物が誕生の声を挙げる。その「三」は3倍の「九」を生み、さらに9倍の「八十一」となって永遠に続いていく。それぞれの数は、個別の数であると同時に、自らを全体（「一」）に繋ぎ止める媒介であり、区別や分断においてではなく、関係性と感応性において機能しているのである。

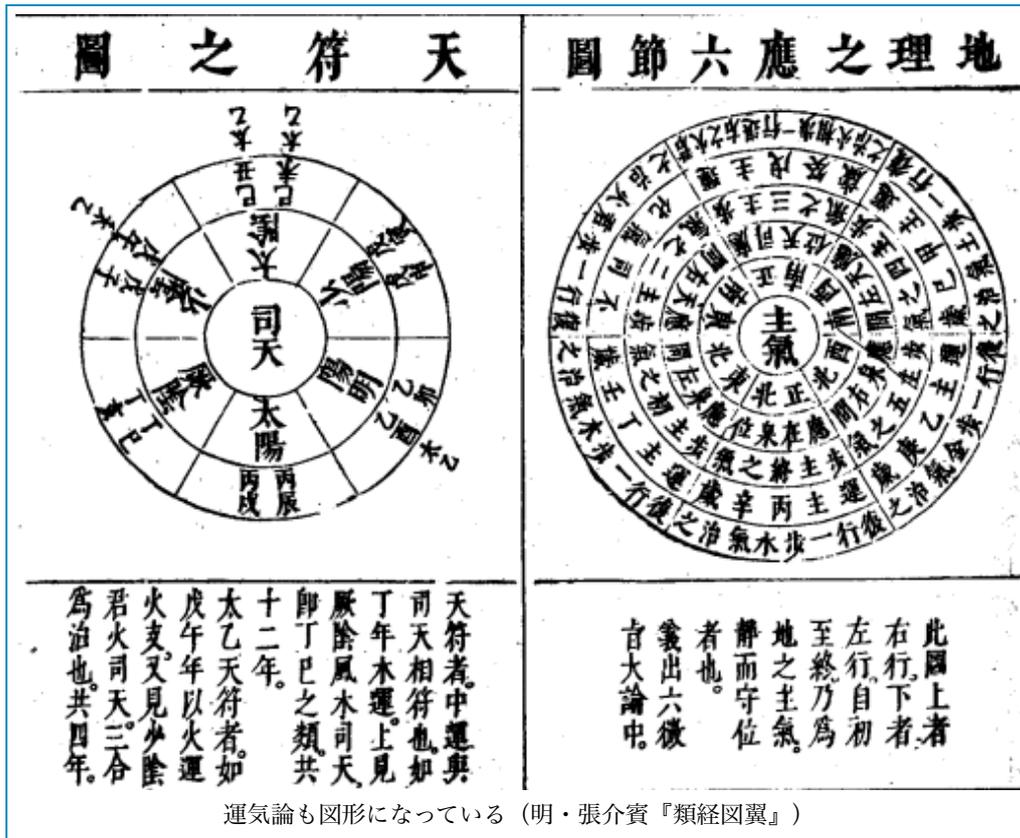
#### ◇感応し共振共鳴する気のネットワーク

上に引用した『素問』『靈樞』の数も同様である。どの数も、それ自体の独立性を主張してはいない。万物が他と繋がり、究極において宇宙と繋

がる天人合一の「融即」構造にあることを論証する目的で用いられている。これらの経文は、天人合一観を示すものとしてこれまで何度も紹介してきた。ここで全経文の解説をやり直し、「融即」律による解釈と通常の（近代人的？）解釈とがどう違うかを示したいところだが、『靈枢』経別篇の一文に限って試みれば、あとは推して知るべしであろう。

原文は次のものである。

「人の天道に合するや、内に五蔵あり、以って五音、五色、五時、五味、五位に応ずるなり。外に六府あり、以って六律に應じ、六律は陰陽諸経を建て之を十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時に合す。十二経脉は、此れ五蔵六府の天道に應ずるゆえんなり」



運氣論も図形になっている（明・張介賓『類經図翼』）

この文章を、南京中医薬大学編の原著の日本語翻訳版である『現代語訳 黄帝内経靈枢 上巻』（東洋学術出版社）は、こう解釈している。

「人体と自然界は相応しており、人体の陰に属する五蔵は、五音・五色・五時・五味・五位に相応している。陽に属する六府は、六律に相応しており、六律は六陰と六陽に分けられるので、人体の十二経に合致し、十二月・十二辰・十二節・十二経水・十二時に相応している。これが五蔵六府と自然界が相応する状況である」

これでは、原文を少し現代語に近づけただけで、意味の分かる訳文にはなっていない。「相応」は、『黄帝内経』に出てくる語彙だが、それをどう古典的に解釈するかが理解の決め手であり、「相応」のままではとりわ

け日本人読者の誤読を招くだろう。「相応」という古典語は、「相互に感応している」と読み取るべきだが、もし、「相い対応している」と理解するなら、矛盾律に基づく近代人の解釈になってしまう。

つまり、「人体と自然界」「五蔵と五音・五色・五時・五味・五位」「六府と六律」「六律と人体の十二経、十二月・十二辰・十二節・十二経水・十二時」「五蔵六府と自然界」が、分離されたまま並列され、数の語呂合わせとして無味乾燥に一对一の対応をさせられるにすぎなくなる。宇宙と人体は融合し感応する統一体であることを高らかに謳い挙げたこの経文から伝わるべき感動が、むなしく雲散霧消してしまうのである。

ついでながら、「天道」を無機的な「自然界」としているのも誤訳だろう。そこにも南京中医薬大学編の原著の近代的偏向が示されている。古典ギリシャ語の「自然（ピュシス）」と「宇宙（コスモス）」の定義を参考に考察すると、古典中国語の「自然」は、自ずから生まれ運動する生命体の連鎖であり、「宇宙」は、天空と大地を含む秩序と構造を持った全体性である。「天道」は日月星辰の運行の恒常性、気の上下陰陽の法則性という秩序と構造を持ち、政治、社会、人生、医療の指針となる。もし現代語にするなら、「宇宙」とすべきである。

わたしがこの経文を「融即」律に従って解釈すると、次のようになる。

「万物は気でできているので、人の構造・機能は天道と合致し感応し共振共鳴している。陰の部にある五蔵は、同じく聖数五によって同質と分類され、万物を形成する五つの音、五つの色、五つの時（＝春・夏・長夏・秋・冬）、五つの味、五つの方位（東西南北と中央）と感応し共振共鳴している。陽の部にある六府は、天空に奏でられる天の六律（＝音楽の六音階）に感応し共振共鳴し、陰の六律は陽の六律と合わせて十二律となって陰陽十二経脈を構築し、一年十二の月数、十二の月の符合、十二の節気、大地を流れる十二の河川、一日の十二時間と感応し共振共鳴している。人に十二経脈があるのは、天六地五という聖なる天数を体現している五蔵六府が天道と感応し共振共鳴しているからなのである」

ここには、数と音楽を媒介に宇宙から人体まで万物が相携え感応し共振共鳴する気の大ネットワークが描写されている。これが天地宇宙教とも呼ぶべき『黄帝内経』の精神世界なのである。

今回は、経脈の長さも実測値ではなく数術に基づいた宇宙論的数値であることを見抜き、『黄帝内経』研究に新しい地平を開いた中医学者、卓廉士の考えについて紹介する。

---

ツイート 2

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

**HUMAN WORLD**  
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [求人天国](#)

[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.